

絵を見て、語りを聴いて、そしてイメージを膨らませて物語世界にハマる！

豊かで楽しいもうひとつの仏教文化

絵解（えとき）の世界

絵解（えとき）の魅力を見直し

●講師 名古屋大学文学研究科人類文化遺産テキスト学研究センター教授 阿部泰郎

聖徳太子絵伝



絵解（えとき）は仏教とともに日本に伝わり、近代まで広く民衆に親しまれました。貴族や知識層に向けた難解な経典などとは異なり、絵解き師たちが独自の語り口で、釈迦の伝記をはじめ、寺社縁起、高僧伝や合戦に至るまであらゆる題材を絵を見せながら語りました。聴衆を退屈させずに引き込むためにはさまざまな工夫もなされたことでしょう。また聴き入る人々はさまざまにイメージを膨らませてその世界を味わったことでしょう。絵解きを知るとは仏教を語り継いできた人々の歴史を知ることでもあり、かつての日本人の暮らしやその考え方を知ることでもあります。また絵解きは芸能の側面も併せ持ち、中世には専門の芸能者として「絵解」が登場。近世に地獄・極楽を語る熊野観心十界図を用いて活躍した熊野比丘尼は、絵解き文化の代表的な担い手でした。

講座では、日本の絵解の中心として、古代から現代まで生き続けている「聖徳太子絵伝」の絵解を中心に、その世界の面白さと豊かさをわかりやすくレクチャーします。

★安城歴史博物館で開催中の「まねる／うつす／つたえる」伝で復活する最大傑作の、本證寺聖徳太子絵伝（十幅）の絵解き公演（10/9）についてもご案内します。

追記
「・・・たけは又、私に道徳を教へた。お寺へ屢々連れて行つて、地獄極楽の御繪掛地を見せて説明した。火を放（つ）けた人は赤い火のめらめら燃えてゐる籠を脊負はされ、めかけ持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながつてゐた。血の池や、針の山や、無間奈落といふ白い煙のたちこめた底知れぬ深い穴や、到るところで、蒼白く痩せたひとたちが口を小さくあけて泣き叫んでゐた。嘘を吐けば地獄へ行つてこのやうに鬼のために舌を抜かれるのだ、と聞かされたときには恐ろしくて泣き出した・・・」

太宰治の小説『思ひ出』に出てくる一節です。少し前まで暮らしとともにあった「身近な絵解き」ですね。

■日時 10月4日（火）14時～15時半

■受講料 1回 3,000円

■会場:imy (アイエムワイ) 会議室
地下鉄東山線千種駅①番出口徒歩2分・桜通線
車道駅③番出口徒歩2分、JR千種駅徒歩5分
(メルパルク北隣)

お申し込み方法

電話・FAX (052-684-5894) でご予約のうえ、下記口座にお振り込み下さい。

三菱東京UFJ銀行 栄町支店

普通 0160603 創企舎ソフィー



創企舎 ソフィ

460-0007 名古屋市中区新栄2-6-13

Tel/Fax 052-684-5894 (直通090-8474-6363)

Email: soukisha-sophy@gd5.so-net.net.jp

URL: <http://s-sophy.com>

創企舎ソフィ

検索